



『炭焼きのとき』 通年コース第十三・十四回開催報告「炭焼き・復習」



点火です！

十二月になったというのに冷たい風もなく、むしろ暖かいと感じる陽気に、ドラム缶も炭化炉も気を良くしたのか火がよく回り、早々に白い煙りが立ち上る。

穴を掘ってドラム缶を埋め、竹をぎっしり詰め込んで、泥をこねて目止めをした口焚き。燻きが出来たら焼き芋。炭化炉も、これでもかとニセアカシアを詰め込んで、山と盛った焚付けに点火をしたら、こちらも泥で目止



どろんこ遊び？

め。早くもこの時点で炭焼きに嵌りそうな面々。ゆっくりじっくり焼けるまでは、学習会と忘年会。森林のゆくえ、塾生の方々の将来への期待と不安などを話しながら夜は更けていきました。翌日は粉雪舞う朝に炭出し。炭化炉は燃え残りがあつたり、火が燃つていたりで不出来でしたが、ドラム缶は竹

の形もそのままの、期待以上の出来栄えの炭となりました。そしてその後は、保科先生の山の見学班と測量班・伐木造材班・集材班とそれぞれに分かれての復習講座となりました。日本有数いや世界有数のカラマツ林はどうでしたか。復習の作業では気に掛かっていただけがスツキリしたでしょうか。早いもので今年も師走。森林塾通年コースも残すは翌年三月のきのこの菌打ちだけとなりました。皆様、良いお年をお迎え下さい。



今回の内容

通年コース
第十三・十四回

12月1日(金)

炭焼き

8時30分

鳥嶋先生の山小屋に集合。事務局の挨拶と日程説明。早川講師の炭が焼ける原理や黒炭と白炭の違い、炭焼き方法の講義。

9時

ドラム缶炭焼きの準備にかかる。小屋横の地面を奥下がりになるように掘り設置。赤土を水でこねる一方、竹を八十センチ程に伐り、びっしりと挿入。焚き口をつけて、目止めをし、土で埋めたら点火。交代で口焚きをしつつ、ダンボールの即席うちわで空気を送る。

9時45分

炭化炉の一段目を補修。通気孔のフタと木の枝をまるめて火道をつくったら、地面を均して一段目を設置。敷木を並べて火道を立て、ニセアカシアの材を投入。二段目・三段目と進み、泥で目止めをして、焚付けを山と盛ったら、点火。



森の応援団になって下さい

11時10分

火の番をしながら、ドラム缶の口焚きのところで焼き芋づくり。炭化炉では焚付けをどんどん投入。

11時50分

昼食。昼休みにも窯の様子を見に行く。

13時

炭化炉の最上段を設置して、煙突を立てる。後は通気孔で燃え具合を確認しながら煙突を移動させたり、目止めを補修したり。

13時20分

学習会開始。鳥嶋先生の講演からイントロのお話。塾生の方々との意見交換。

15時30分

早くもドラム缶の窯止め。この間も学習会は続く。

18時10分

忘年会開始。各種酒類に鍋とおでん、早川講師お手製



保科先生の山にて

21時15分
炭化炉もこの時間に窯止め。この間も宴会は続きました。

12月2日(土)
復習

8時30分
島崎先生の山小屋に集合。日程説明のあと、炭出し。炭化炉は生焼けの部分あり、火が燃つてるところありで不出来でしたが、ドラム缶ではきれいな竹炭が。そして復習は、見学・伐木造材・測量・集材の四講座。伐木班は一足速くイントラ川島さんと現場へ。

9時45分
見学班は早川講師と旧長谷村の保科先生の山を目標して出発。測量班もイントラ後藤さんと現場へ。

10時
集材班がロギングで現場へ。その後の見学班は、戸台のカラマツ林着。十



河原でお昼

11時
アールの試験地見学の後、ミズナラの純林を経て尾根近くの樹高生長の良いカラマツ林へ。

12時20分
林道へ戻り、戸台川合流点近くの河原で昼食。

13時10分
集材開始。美和湖対岸のカラマツ林へ向かうが、林道を入ったところで通行不能箇所があり、戻って中央構造線を見学。

14時
熱田神社上の百年生近いアカマツ林見学。昔はマツタケが採れたらしいが、今は

15時20分
雑キノコのみとのこと。春にはミツバツツジのお花畑。

16時10分
KOAバインパーク前庭のアカマツ林を見学。

16時20分
山小屋へ戻る。

16時30分
講師講評、次回連絡をして終了、解散。お疲れ様でした。

参加者/石垣さん、石田さん、石原さん、井上さん、榎さん、大村さん、川越さん、小池さん、坂上さん、

高野さん、高橋さん、堀江さん、山本さん、吉永さん、小名川さん、松岡さん、神保さん、園田さん、長坂さん、講師/島崎先生、早川講師、スタッフ/川島さん、後藤さん、藤原さん、坂野



順調なドラム缶

次回以降の予定

第十五回

3月10日(土)

きのこ菌打ち

早いもので平成十八年度の最終回になります。ナラなどの原木にシイタケやナメコを、種駒を打ち込む方法と鋸菌を塗る方法で植菌してみます。島崎先生の小屋に8時30分集合です。ご希望の方は、ほだ木を持ち帰ることが出来ますので、大きめの袋や紐をご持参下さい。

この時期、積雪や凍結の可能性がありますので、自家用車でお越しの場合は、スタッドレスタイヤやチェーンが必要になることがあります。道路状況等、事務局までお問い合わせ下さい。



リレー通信



神々の降臨なさる森を甦らせたい

遠山 元紹

先日は、講師・インストラクターの皆様には、まことにお世話になりました。また、参加した皆さんからも色々教えて頂き面白い話も伺え、ありがとうございました。何も実地を知らない者が、たった三日であれ、目で見、体を使い、頭もフル回転使って体験した事で、曖昧模糊・想像の領域であったものが、少なくとも以前よりは遥かに具体的に

森や林業の世界を描き出して
くれています。私たちは、先
を行く・後を行くの違いはあ
れ、日本の(願わくば地上す
べての)森が蘇る未来へ、共
に歩み続ける「旅の道連れ」
です。未熟者ではありません
が、これからも皆様どうぞよ
ろしくご指導・ご鞭撻の程お
願い申し上げます。

さて私は、「龍」と「川」に
少し縁のある男です。製材所
の木挽きの音響く天竜川のほ
とりに生まれ、節句の兜はな
げか龍を戴き、その名も清き
天竜川に通い、その三年生
時の担任は玉依先生(タマヨ
リヒメ)ノミコトは海神で龍
宮の乙姫さま)。大学中退時
に探求を始めたのも琉球(龍
宮)でした。また、伊勢のと
ある山頂で空海が鎮めた八大
龍王社をお詣りすれば、その
眷属のそのまた眷属神が、我
が体を乗り物と借り受け、は
るばるネパール・インド共に
旅する怖いもの知らずのお人
好し。そのインドはプーナの



今の人
工林
が必
ずあ
る。
の揺
り戻
し
が必
ずあ
る。
の揺
り戻
し
が必
ずあ
る。

「Osho Commune
International」では、イン
ド・中国を経て京都嵐山の天
龍寺開山夢窓国師に相承さ
れ、今へと伝わる禅の流れ
を、その源の母なる国インド
へお返しすべく、「水琴窟」と
「禅の庭」を創庭した庭のお
師匠様のお手伝いをし、また
最愛の師・和尚(Osho)から
はSw. Jivan Parichar(ニフェ
tawing = 生の流れ)という
まさに「川」のような名前を
頂きました。近年、幼少より
馴れ親しむ天竜川沿いを引越
の度に鯉の滝登り・遡上中、
現在、天竜(来年、浜松市天
竜区となる予定のところ)に
住まう者です。

こんな私が常日煩雑に憂う
のが現在の山況です。名前に
「山」を持つ者の特権として
断固言わせてもらおうと、今
の山は酷すぎる。人工林は無
論大切だが、神々や動植物・生
態系といった自然から見た
時、日本全土いたるところ単
調な人工林だらけというのは
どうだろ
う? 神秘の
世界の神々
が降臨なさ
るだろう
か? 何事も
バランスが
偏れば自然
の揺り戻し
が必ずある。
今の人
工林



率は異常だ。

神々・自然・人々にとつて
「潜在自然植生」に基づいた
本物のいのちの森というべき
森林を蘇らせることが今絶対
的に必要です。潜在自然植生
とは、仮に人間活動が全て停
止した場合、その土地の自然
環境の総和がどのような自然
植生を支える能力を持つてい
るか(科学(植物生態学)的
に考察したもので、ドイツの
ラインホルト・チュクセン教
授が提唱し、その愛弟子の宮
脇昭先生(横浜国立大学名誉
教授・国際生態学センター研
究所所長)が広めている概念
で、日本でのそれは「日本植
生誌」に詳しい。これは、現
場の生え抜きの宮脇先生が全
国三万箇所以上にも及ぶ植生
を調べ上げた植物学の金字塔
です。関東以西の海拔800
m以下の地域の潜在自然植生
は、シイ・タブ・カシ類を主
木とする常緑広葉樹林(照葉
樹林)帯であり、その森は、今

やわすか0.06%しか残つ
ていません。このような森
は、例えば旧岩崎氏別邸の森
では関東大震災時に火災から
二万人もの尊い人命を救い、
神戸市長田区の大国公園の照
葉樹林でも阪神淡路大震災時
に多くの人を守ってくれた、
自然災害に強く長持ちし、高
木や古木がたとえ枯れても後
継樹があちこちに待ってい
て、まさに「永續するいのち
の森」のです。

今、全国的に森の大切さが
謳われ、公的・私的を問わず
資金が投入される機運が高
まっています。例えば水源
の森であれば、それにふさわ
しい保水力の高い森でなけれ
ばウソです。人工林が人工林
として立ち直っただけでは目
的は達せられません。例えば
ヒノキの資源生産林でも思い
切つて透かして、生えてきた
植物を潜在自然植生にした
がって選択・誘導することが
必要と考えます。潜在自然植
生に基づいた森は、高木層か
ら中低木層・草本層が一つと
なった立体的な森で、生態学
的多様性に富むのはもちろ
ん、同時に保水力の高い水源
涵養林、防災や環境保全の森
であるからです。また、生産
林にふさわしくないとこころや
間伐手遅れ林分は潜在自然植
生の森に完全に創りかえる必
要も出て来るでしょう。植林
をしなければならぬかもし

れません。その時は、宮脇式
のポット苗はもちろん、山寺
喜成先生(信州大学特任教
授) 提唱の直根を伸ばす
「シードベース(保育プロツ
ク)工法」を積極的に採用し
てほしいものです。
我々の祖先は自然を皆殺し
にはしなかった。それぞれの
村や町で、神住まう森を手を
付けてはならない「鎮守の
森」として大切に守つてきま
した。今や「チンジュノモリ」
は生態学の世界では世界共通
の用語です。「潜在自然植生
の概念を具現化した鎮守の森
こそ、日本の祖先達が数千年
来まもってきた自然を敬い共
生する類い希なる英知であ
り、二十一世紀に引き継ぐべ
き財産である。日本が次の世
代に残す素晴らしいいのちの
森づくりとその成果を、世界
の人達に自信を持って示し、
共に進め、広げていこう。
宮脇昭

自分なりの山への想い、ま
た、森や木々を通して日頃感
じていることなど、語りた
いテーマは尽きませんが、ここ
では今回、自分が山仕事へ感心
を持つようになった経緯に文
字を費やしてみたい。
僕の出身は大分県日田市。
九州のほぼ中央、福岡と熊本
との県境付近に位置する盆地
で林業の町、日田杉の産地
である。子供の時分、キノコや
山菜、クワガタ獲り、また「探
検」などと称して山に入つて
遊ぶほどの環境はごく普通に
あつたし、家族が暮らしてい
た県営住宅のアパートは風呂
が新で沸かす五右衛門風呂ス
タイルだったので、兄弟三人
で風呂炊き当番を務めていた
体験などから、人と自然の密
接な営みの関係を知らず知ら
ずに体験していたということ
ができるかもしれない。た
だ、我家には田畑も宅地も山
も、おおよそ自身で管理をし
なければならぬような財産

リー通信
「山という財産」
山崎 和義

と呼べるものはなかったし、町内が、ぐるり杉山に囲まれていたにも関わらず、一度だつて山の作業を見かけたことがなかった(すでに斜陽産業だつたと思われる)。だから故郷にいた時でさえ林業や山仕事というものが身近に思えたことはないし、山に囲まれた環境こそあれ、山を識る機会はなかった。だから、僕自身、高校を出ると同時に上京し、成人、就職と年齢を重ねる毎に山はおろか自然からも遠ざかっていつてしまったことは、無理もないことだつたのかも知れない。

そんな僕が、あらためて山を意識するようになったのは、妻との出会いが大きいです。彼女は新潟の中越、西山町(現・柏崎市)の出身で、公務員(教員)の家庭に生まれた、女二人姉妹の長女であつた。実は僕自身も長男なのだが、とにかく僕が妻の家の籍に入るということで結婚した。そして、僕らの将来を見据える時、新潟の家に所有している宅地や山林・田畑のことは必然的に話題のぼり、次第に現実の所有物としてこれらの土地を思い遣るようになり、いずれば新潟の地で

自給自足を基盤とした生活を築くことが二人の目標になつた。もともと二人ともキャンブやアウトドアの遊びが好きだつたこともあり、パーマカルチャーや自然農などをすすんで学ぶようになったし、学びを進めていけばいくほど、環境汚染や温暖化、ゴミやエネルギーなど、エコロジー全般の問題について無関心ではいられなくなつた(これは羽原亮がすぐ近くにあるという恐れよりの現実が、二人の将来に突きつけられたことに大いに関係がある)。

それら財産となる土地のほとんどもは、住居のある集落の奥の、かつては人の往来が賑わつていたであろう山の中に点在しているが、調べて見ると、一年に一度、所得税申告の時以外は忘れられていて、しかし思えない有り様だつた。

僕らには、そんな管理責任を放棄された如く、手付かずで荒廃している田畑や、我々素人目からも分かる程の悲惨極まりない杉林の現状が悲しかった。恥ずかしながら、すでに書類上でしか分からない所有地もある。

そんないたたまれない状況から、僕らは、自給生活に向けて歩みを進めるべく実践に入つてゆくことにした。人伝で(時には新聞・雑誌・テレビ放送などの情報をもとに)いろいろな実践者や施設を訪ねたり、話を聞きに出かけたり、ワークショップやセミナーなどにも、興味あることにはなるだけ時間を割いて参加した。そんななかで、長野の泰阜村にある「だいだらぼっち」という、小中学生中心の山村留学施設で佐々木裕子さんという女性と出会つた。訊けば彼女は



「KOA森林塾」できこりの技術を学び、天竜村で、母と娘二人(娘は施設に入っている)で女独りで、というべきか? 自給自足をしながら、実際にきこり仕事もやっていると。たまに施設に伺つた折りに佐々木さんと話をする機会も増え、何と

いつても自給生活を実践している先輩として興味深く、お互いにいろいろと語り合つた。彼女と話をすればするほど山の仕事もそれほど難しいことではないという事実を知り、「通年コースで一年間学べばたいがいのは身に付くわよ」という彼女の言葉で、僕には俄然山仕事というものが身近に感じられ、ぜひ一度でもその森林塾に参加してみたいと思つた。しかしちょうど頃、自然農の第一人者である川口由一氏の自然農合宿会(奈良)に一年間通うことを決めていたこともあり、本年度の秋の集中講座だけでもまずは参加してみようと思つてい

た。訊けば彼女は「KOA森林塾」できこりの技術を学び、天竜村で、母と娘二人(娘は施設に入っている)で女独りで、というべきか? 自給自足をしながら、実際にきこり仕事もやっていると。たまに施設に伺つた折りに佐々木さんと話をする機会も増え、何と



座を終えた帰り道では、とても充実した気分が胸いっぱいだった。自分の可能性の広がりを、四十歳を過ぎてもこれほど歓びとして感じる事ができるのは、素晴らしいことだ。僕の組のインストラクターを務めて下さつた大野さんは講習の終盤に言った。「どうですか? 山仕事、自分独りでもできそうな気がしませんか?」と。

そんなわけで先の十一月初旬、僕は少し緊張した面持ちで伊那へ出向いた。しかし、たつたの三日間足らずの時間だったが、山に關してはまったくの素人である自分が、講

なければ!」という想いでした。その想いは変わりませんが、まずは自分の住む地域の山をなんとかしようと改めて活動を開始したところ。私の場合、まずは近場の山から。全てはそこから始まるような気がしますし、それが出来ないようなら、日本の山などでも無理だと思えます。

霜柱、きらきら。踏むと、さくさく。そんな季節になりました。

「イントラ川島」

おわりに



投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: sh-sakano@koanet.co.jp
ki-hayakawa@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp